

---

# my way

優女

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

my way

### 【Zコード】

Z2199BA

### 【作者名】

優女

### 【あらすじ】

万事屋三人がタイムスリップ！！その場所は…？  
銀時たちがそこで見たものとは…？

## 第1話　自分史は大事でしょ（前書き）

万事屋「冠連載小説です。あ、銀さんが「KAMUI終わった」って嘘言つてますけどほりつておいてください

## 第1話　自分史は大事でしょ

万事屋。

説明は特にいらないよね、皆さん知つての通りですから。

いつもと同じ朝。

小鳥のさえずりが澄んだ空気に馴染んで優しく聞こえる。

「ふあああ～」

寝巻きの万事屋オーナー、坂田銀時が欠伸をしながら居間へ出てきた。

今日はいつもより少し早く目覚めた。

気持ちのいい朝、と素直に感じた。

「あけましておめでとうございます、つて何言つてんだ。とつくな  
明けてるつつの。KAMICOも終わつてやつと新しい万事屋[冠連  
載もつたのになんだよこの登場。地味にも程があるつつの。し  
かもあるあるネタでよ、できあがつてんだよ。結末は！」

と、一人ブツブツ愚痴を言つてると神楽も居間へ入ってきた。

「朝から一人で何言つてるアルか。恥ずかしいつたらあいつやしない  
…」

田を擦る。いかにも眠たそうな態度。

「せーなア。たまには仕事の愚痴を言いたいもんだ」

「仕事の愚痴は家に持ち帰るもんじゃないネー」

「ハイハイ」と軽く流す銀時。

「もうすぐ新ハが来る頃だな」

「//タさんみたいに時間ちよつときしで来るアルか」

「セコまできつちりしゃねーから」

そう言つてると扉が開く音がした。

「噂をすればアル」

新ハが来たのは確かだが、なかなか入つてこない。//シシシと床が  
軋む音が響く。

やつと居間の戸が開いた。

「おはようございます。銀さん、玄関にこんなものが

ドカッと置いたそれは電子レンジのような機械だった。

「家のレンジはまだ壊れてねーけど。つーか誰だうちに粗大ゴミ置いたのは！」

怒る銀時の傍ら、神楽は不思議そうに機械を見つめる。

「私の部屋には置けないアルからな。新八の家に持つてつたら？」

「いや、うちに置いたら姉上がすぐに壊しちゃうから

困る二人。机に置かれた謎の機械。

しばらく眺めるだけになる。

「動くのかア？」

銀時が機械のふたに手をかけた。

「銀ちゃん！一応冷や飯持つてきたアル

「オイオイ、まだモノホンの電子レンジって決まったわけじゃねーつて

「それじゃあこの機械は一体…」

銀時はとつてを握った。  
そして開けた。

三人は中を覗いた。

「なんだ、ただの電子レンジじゃないですか」

「エエラセんなヨ」

「ありきたりなレンジだなあ」

アハハと談笑する三人。

「…アレ、神楽。お前いつの間に着替えた?」

「そういう銀ちゃんじゃ、わたくしの寝巻をせびうしたネ」

お互に自分の服装を見る。いつもの着流し姿。靴も履いている。

「アハハ、こりやアレだ、叙述トリックだ。文面ならではの特権だ  
よ

「凄いアルな」

「なわけあるかアアア！－！」

新八のシャウト。

「周りを見ろ……そこまで僕ら万事屋にいましたよね！？なんでいきなり草原！？」

「すげーなオイ！叙述トリックも進化したもんだ。これでどこでも行きたい放題だア」

「そつアル！所詮、読者に伝わらない限り自由自在ネ！…」

「そんな読者に分かりづらい小説なんてすぐに打ち切りだアアアア！分かれよー！お前らがいの一一番に状況を把握しろよー！」

新八の説教が続く。

「わーったよ。分かるよ、俺だつて大人だもの」

「さすが銀ちゃん大人ネ！！冷静沈着は身に付いてるもんアル」

「ここ」でやつと落ち着いた三人。

やつぱり周りは草原。この広い草原に三人と謎の機械だけがいる。

「…どうしよ、どうやつたら戻るんだー？つーかこの機械のせいだよなーどこでもドアならぬどこでも電子レンジかよー！」

銀時は機械を持ち上げた。が、とたんに機械は崩れ落ちた。破片がむなしくバラバラと地に落ちて砕ける。

「「「……」」

「ふう、処分は終わった。よし、けーるぞ」

「けーるぞじやねーだろコレホエホーーー元壁に帰れなくなつちやつたよーーー」

「俺が悪いってのか!?俺か!?ああ責めるだけ責めればいいじやねーかー!俺ア悪くねーからなーーー」

「いや、誰も銀さんが悪いなんて言つてませんよーーー」

「持ち上げたら崩れ落ちた、それだけのことアル」

なんとか一人に慰められた銀時。

しかし一体ここはどこなのかまったく皆田見当がつかない。

三人は突然の出来事に戸惑いながらも、とりあえず歩くことにした。歩けば誰か人に会えるかもしれない。

「…道だーーー」

新八が指を指す。

田舎の田んぼの畦道のようだった。

「(イ)を歩けばどつかに辿り着くネ」

だが、銀時の様子が少し変だった。

この道、(イ)の風景…

「どうしたんですか、銀さん」

「いや……」

かぶりを振った。

いやまさか、こんなはずがない。

向こうの方から、誰かの足音がした。

走る足音。

子供たちが向こうから走つて来るのが見える。その中に一人、長身の大人がいる。

「やつた、人アル！」

新八と神楽もそつちに駆けて行く。だが銀時だけは立ち止まつた。

そのシルエットは次第にはつきりと露になる。

「……嘘だろ？」

長身の人物の正体。

「しょ……松陽……先生」



## 第2話 1日は挨拶から

目の前にいるのは紛れもない、かつての恩師、松陽先生だ。

「世の中には似た人が三人いる。俺の場合は大泉洋と毛玉、ウン」

じゃあ目の前にいるのは？

「銀さん！ ありがたいことに家まで案内してくれるそうですよ！」

「よかつたアル！ これで飢え死には避けられるネ！ ！」

「あつ、そつか」

言われるがままに、新ハと神楽に手を引っ張られる。

「こんにちは」

長身の人物は軽く会釈する。

「じつにちは」

「噛んでるし」

へつと笑う神楽。

「私、村塾を開いてます、吉田松陽といいます」

松陽と名乗る男は一コラと微笑んだ。

「え、あ、どうも」

モノホンなんん!?

「ちょ、ここのチビ、銀ちゃんにクリソッネ!…生き別れの兄弟アルか!?」

神楽の横にいるのは周りの子供と同じくらいの背丈で、だいたい7歳くらいの銀髪で天パで死んだ魚のような目をした子供がいた。

「本当だ!銀さんこそっくりですね!…」

その少年は不思議なものでも見るよつに銀時を見つめる。ひきつた顔の銀時。

「ここの…もしかして…」

銀時は新ハと神楽を強引に引っ張り、数メートル先まで下がった。

「ちょ、何するんですか!」

「お前ら、落ち着いて聞けよ。アレは紛れもねエ、俺だ」

「えええ!…!…」

とつねに一人の口を抑える銀時。

「俺たちばかりやつタイムスリップしちまつたようだな。あの電子レンジで」

「なるほど、レンジでチンした末がこいつ」とアルか

「なんもうまくねーよ！お前らは別にいいかもしけねーが俺の場合、俺があそこにいるからバレねーようにしねーと」

「大丈夫ですって。あんなに可愛い子供時代の銀さんが大人になつたらこいつなるなんて誰も思いませんよ」

「レンジでチンした末が今の銀ちゃんね」

「どういふ意味だコノヤロー」

三人は素性がバレないよとにと確認し、再び松陽たちの前に戻つた。

「すみません、俺たち旅人でして、ここら辺のことは何もわからない紛いモンでして。ああ、こっちの眼鏡が新ハでこっちのチャイナが神楽。で」

「銀さん、でしう？」

「え？あつ、まあ、そうです」

松陽はそれ以上聞かなかつた。

「それじゃあ付いて来てください」

万事屋三人は松陽の後を歩いた。

\*\*\*\*\*

しばらく歩くと村塾が現れた。  
懐かしいな、と呟く銀時。

「さあどうぞ」

松陽の誘導で、三人は塾とは別の部屋に入った。銀時には見覚えがある部屋だった。思い出したくない記憶もある。

お茶を出した後、松陽も一服した。

「三人はどうから来たんですか？」

「かぶき町アル」

「へえ、そんな遠くから」

銀時はどうも落ち着かない様子。

「銀さんでしたよね

急に呼ばれてお茶を吹く銀時。

「汚いアルな」

「何動搖してんすか」

「ばつ、ちげーよ。巻き舌なんだよ俺ア」

「猫舌ね」

アハハと笑う四人。硬直していた空気が少し和んだ。

「で、なんでしたっけ」

「あなた、私の教え子にそつくりだなあつて

「だつ、誰にですか！」

またお茶を吹く銀時。

「先生、あつちで高杉君と坂田君が喧嘩してます

一人の生徒が松陽に報告した。

「すみません、ちょっと空けますね」

そう言うと松陽は部屋をあとにした。

「高杉つてあの鬼兵隊の高杉さんですよね」

「まあ……」

軽く頷く銀時。

「坂田君って銀ちゃんのことアルな。昔から仲悪いアルか」

「せーな

頭を搔ぐ。

「とにかく早くもとの時代に戻る方法を考えねーと」

「IJの際銀さんの子供時代を堪能するのも悪くないですね」

「子銀ちゃんなら可愛いアルからな」

「ヤツと向やら企む一人。

「お待たせしました」

襖が開き、松陽が入ってきた。

「喧嘩、大丈夫ですか？」

「ええ、一人ともしようもないことで喧嘩していく。笑っちゃう話、みかんを取り合っていたんです」

「「ぶつ」」

銀時の顔を見るなり急に笑いだす新八と神楽。

「なんだよ

照れ隠しする銀時。

「みかんの取り合いでって、可愛いことしてたアルな」

ぐごごいと腕で銀時をつつく神楽。

「まあまあ神楽ちゃん。銀さんにもひつひつ時代があるんだよ」

小声で話す一人。

なんだかハブにされている銀時は茶をすすつた。

「結果、どうなったんですか？」

新八は尋ねる。

「もちろん、半分」です。でもまだ一人はそっぽ向いたままでけ  
ど」

「強情なところは今でも変わらないアルな」

ふふふと小瀬に笑う。

「すんません、廁借りてもいいですか？」

「はい、どうぞ」

銀時は立ち上がり、襖を開けて部屋から出てこいつとした。

「あの、場所分かります？」

松陽は呼び止めた。

銀時はうつすら廁の場所を覚えていたが、ここでは不自然だ。

「あつ、どこですか？」

ヤベツと思い、足を止めた。

「突き当たりを右に」

松陽は優しく笑うだけであった。

銀時がいなくなつたあと、松陽は新ハと神楽に話し出した。

「なんだか、彼を見ると安心しますね。不思議ですけど」

「銀ちゃんアルか？まったく安心できないね。万年金欠で家計は火の車ネ」

「給料も口クに払わないし、ちゃんとほらんだし。ホント銀さんに  
は参っちゃいますよ」

二人は松陽がかつての銀時の恩師だということは知っていた。銀時  
の親でもあるような松陽に、今の銀時を知つて欲しかつたのだ。

「二人は彼の…部下なんですか？」

「部下っていうか、いつも一緒にいるんで。まあ家族みたいなもんです」

「貧乏家族アル」

「そうですか」

松陽は安堵したかのように笑った。

「やつぱり聞かなくても俺の記憶は正しかった」

廁を済ませ、部屋に戻る途中、銀時は足を止めた。

さつき高杉と喧嘩をしたという自分が、外の渡り廊下に座っていた。銀時は子供の自分の横に座った。自分に話しかけるなんて可笑しいと感じたが、何故かほうつておけなかつたのだ。

「…何してんだ、こんなところで」

「ほつとけよ」

「可愛くねー奴」

自分が相手は子供だ。何年も前のことだし、覚えてるはずもない。

「喧嘩したの、まだ根に持つてんのか。その気持ちよく分かるよ。アイツにだけは負けたくねーって」

「…同じ髪」

突然、子銀時は銀時の頭を指差した。

「あつ、ああ。かわいそつだろ？天然パーマ。いつかストレートにしてやるって意気込んでるけど」

「…似合つてゐる」

思いもよらない言葉に、惑つ。

「アンタも似合つてゐるぜ」

子銀時は笑つた。

「お前、名前は？」

「(笑)で坂田銀時です、なんて言つたら驚いてしまつ。

「俺は万事屋銀さんだ。頼めばなんでもしてやるよ」

「へえ」

また子銀時は可笑しく笑った。

なんだか自分に笑われるなんて複雑…。と嬉しくも悲しくなった。

「…つーか、俺ってこんなに話す子だったつけ

子銀時を見つめる。

「おいチビ、お前もつと笑えよ? なんでもつと先生のお手伝いもしく。勉強もして、いい大人になれよ」

「チビじゅねーよ。ちゃんと銀時つて名前あんだけ

そつ言つと子銀時は他の子供たちがいる方へ駆けて行つた。

やれやれと一息つくと、銀時は部屋へ戻つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2199ba/>

---

my way

2012年1月5日23時50分発行